

(一社) 東洋音楽学会 西日本支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第75号 (2013年6月20日)

定例研究会のご案内

東洋音楽学会西日本支部 第261回定例研究会

日時：2013年7月20日(土) 14:00～17:00

場所：京都市立芸術大学 新研究棟7階

日本伝統音楽研究センター 合同研究室1

◎阪急桂駅からの場合

桂駅東口バス停から(西口バス停もありますのでご注意ください)、京阪京都交通バス 1、2、13、14、25、28系統に乗車、芸大前(約20分)にて下車、徒歩すぐ。

◎JR桂川駅、阪急洛西口駅からの場合

京阪京都交通バス 11A系統(京都成章高校前行き)に乗車、芸大前(約15分)にて下車、徒歩すぐ。

ヤサカバス 1号系統(桂坂中央行き)に乗車、国道沓掛口または新林池公園(約15分)で下車。国道沓掛口から徒歩で約10分、新林池公園から徒歩約20分。

例会担当：山田 智恵子(京都市立芸術大学)

《研究発表》

(1) フィンランドの民族楽器「カンテレ」とその旋律の伝承

——19世紀初頭から20世紀前半を中心に

畑 智子(京都市立芸術大学大学院)

(2) 日本近世における中村惕斎の『律呂新書』研究

——斎藤信斎および安倍季尚との関係を手がかりとして

榎木 亨(関西大学大学院)

(3) 室町時代北野社における奏楽の場(仮題)

三島 暁子(京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター)

* * * * *

定例研究会の記録

東洋音楽学会西日本支部 第259回定例研究会

日 時：2013年3月15日(土) 13:30～17:00

場 所：国立民族学博物館(民博) 第6セミナー室

司 会：寺田 吉孝(民博)

例会担当：田中 多佳子(京都教育大学)

《映像上映》

Guitars of Portugal (民博製作、2013年、46分、英語)

《特別対談》

民族音楽学の草創期——北米と日本

ロベルト・ガルフィアス(民博、カリフォルニア大学アーヴァイン校)

徳丸 吉彦(聖徳大学)

※講演予定だったダルエスサラーム大学(タンザニア)の Kedman Mapana さんが事情により来日できなくなったため、当日のプログラムを変更いたしました。

〈要旨と報告〉

本定例研究会は二部構成で、第1部は“Guitars of Portugal”の映像の上映であり、第2部は、ロベルト・ガルフィアスと徳丸吉彦が「民族音楽学の草創期——北米と日本」というテーマについてそれぞれの立場から話し合った。

“Guitars of Portugal”は2006年にポルトガルで撮影された、現時点ではまだ編集中のドキュメンタリーで、ロベルト・ガルフィアスがポル

トガルのさまざまなギターの種類、歴史的な背景、ギターの製造、伴奏する音楽ジャンルをそれぞれに紹介している。

イベリア半島にあるポルトガルは、隣国のスペインと音楽の面で共通点を持ちながら、独特の楽器と音楽ジャンルも持つ。それに加え大航海時代にはポルトガルの音楽的な影響力もかなりあり、例えば、ハワイのウクレレの起源は 4 弦の *cavaquinho* というポルトガルの楽器にある。ポルトガルに独特なギターを 2 つほど挙げると、1 つは細いウエスト（くびれ）をもち、軽やかに鳴らしたりメロディーを弾いたりする *viola campaniça* があり、もう 1 つは 250 年前、イギリスのシターン (*cittern*) から誕生したポルトガル・ギター (*guitarra portuguesa*) がある。後者はリスボンとコインブラを中心に 2 つのスタイルのポルトガルの民俗音楽を代表するファドを伴奏することで有名である。映像は 46 分、現時点では未完成の作品なので、質疑応答のさいには映像に関するさまざまな提案があった。

第 2 部では、ロベルト・ガルフィアスと徳丸吉彦がそれぞれ個人的な視点から、民族音楽学の始まりと発展について発表した。ガルフィアスは歴史的に 2 つの世代の民族音楽学者がいたと考えている。戦前のガイド・アドラー (*Guido Adler*)、エーリッヒ・ホルンボステル (*Erich von Hornbostel*) などは比較音楽学の開拓者であったが、注目されるのは、音楽的な家庭環境で育ったにもかかわらず、異なる専門分野から音楽学の分野に取り組んだということである（アドラーは法律を勉強しており、ホルンボステルの専門は化学であった。）その上、現地に行かずに「音」のみを研究の対象とした。マントル・フッド (*Mantle Hood*)、コリン・マクフィー (*Colin McPhee*) などを含む第 2 の世代は、第 1 の世代と違って音楽の専門家であり、専門の音楽分野を研究するために現地におもむき、フィールドワークをおこなった。民族音楽学の発展の話については、音楽それ自体と音楽のコンテクストの両者が民族音楽学者の研究

対象になるはずと考えられるのに、ガルフィアスから見ればコンテクストの研究が中心となり、音楽それ自体に対する分析が薄くなったと警告した。ガルフィアスは、民族音楽学者が音楽それ自体に対する研究を取り戻すべきだと主張していた。

徳丸吉彦は非西洋人の立場から民族音楽の研究の発展について話した。たとえば、民族音楽に対する過去の見方を反映した ICTM の旧名 IFMC (International Folk Music Council) に対して、徳丸は、雅楽 (日本、朝鮮、ベトナムを含む宮廷音楽) なども 'Folk music' と呼ばれて扱われることに疑問を感じていた。議論の結果、学会の名称変更がなされることになる。また、民族音楽と西洋の「芸術音楽」の区別が有効なのかという疑問から、1985 年で開催された ICTM の Colloquium 'The oral and literate in music' では、民族音楽学者のみならず、ヨーロッパの中世期・ルネサンス音楽を研究しているレオ・トライトラー (Leo Treitler) らを発表者として招いた。1990 年代のベトナム宮廷音楽 (Nhã Nhạc) を復活するというプロジェクトに関連して、徳丸が「Fieldback」の概念を紹介し、音楽の研究は学者のためだけではなく、研究の結果を現地の人々に恩恵として与えることも重要だと述べた。

質疑応答では話題がさらに広がり、環境における音楽の適応力、西洋中心主義を象徴する英語の支配、アメリカの National Council of the Arts の諮問委員であったガルフィアスの、アメリカの大統領との逸話などが紹介された。

(テレンス・ランカシャー 記)

* * * * *

■入会申し込み・住所変更について

(一社) 東洋音楽学会への入会をご希望の方は、80円切手を同封し、下記の学会事務所へ入会案内・申込用紙をご請求ください。申込用紙は、ホームページからもダウンロードできます。会員の異動や住所変更等についても、下記の学会事務所へお知らせください。申し出先は支部事務局ではありませんのでご注意ください!

一般社団法人 東洋音楽学会 学会事務所
〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号室
TEL 03-3832-5152, FAX 03-3832-5152
ホームページ <http://tog.a.la9.jp/>

■研究発表の募集

西日本支部定例研究会での研究発表を希望される方は、発表種別（研究発表・報告等）、発表題目、要旨（800字以内）、氏名、所属機関、連絡先（住所、電話、FAX、E-mail）を明記の上、下記の西日本支部事務局までお申し込みください。

東洋音楽学会 西日本支部事務局
〒565-8511 吹田市万博記念公園10-1
国立民族学博物館 福岡研究室気付
TEL 06-6878-8351, E-mail fukuoka@idc.minpaku.ac.jp

支部だより 第75号

発行：東洋音楽学会 西日本支部 担当：今田 健太郎、北見 真智子
〒565-8511 吹田市万博記念公園10-1
国立民族学博物館 福岡研究室気付
TEL 06-6878-8351, E-mail fukuoka@idc.minpaku.ac.jp